WRI News Letter No 90

1979・9・5　戦争抵抗者インター日本部　大阪市あべの区旭町2-12-2 WRI大阪

宇宙乃奈加万乃安以古止波寞天尓乃里越

ナバホ族バッアさんのこと

8月1日の夕刊をみて「あっ」と声をあげた。『ニューメキシコ州のウラン処理工場で米国史最大のウラン流出事故発生！オニのスリーマイル島事故に発展する様相。事故周辺地域にはナバホ・インディアンの居住区があり、住民への影きょうが憂慮されている…』

つい先日来日した、ナバホ族のバッア（平和の意）さんから、放射能を含んだ残留泥が崩壊、水が流れ出して深刻な問題になっていること。また女性の35%が自分の知らない間に避妊手術をやられてしまっているという恐るべき事実の報告を聞いたばかりだったのだ。

しかし、このような状況の中でバッアさんたちは環境保護グループをつくり闘いを開始している。

「そのグループは？」「全員女ばかりです」「どうして女の人たちばかりなのですか？」「男はエゴが強すぎる。男は仕事を持つことに意義をもっても、その内容にはむとんちゃくだ。組織をつくる時は、女のきめこまかい能力が必要なのです。それと放射能に一番敏感に影きょうを受けるのは女たちですから：」「アメリカの反原発運動でひろがっているフェミニズムとの関係は？」「ナバホ族は母系社会で、男と女は対等にくらしてきました。役割分担はありません。だから、はじめ反原発集会で白人の女たちの云っていることがさっぱりわかりませんでした。なんてバカみたいなことを云っているんだろうと思ったのです。でも大学で、女が差別されてきた歴史と文化のゼミがあって、はじめてその意味がわかりました。いまでは同情をよせています。私たちインディアンの文化は、差別文化を創りかえるための力になることができると思っています。」

バッアさんの話を聞いて、私は深い感動におそわれた。いままで、これほどはっきりと、明確な女の意識を聞いたことはなかった。

かえったばかりのバッアさんの身の上には、またも深刻な問題がおそいかかっている。だが、長い間、白人から過酷な状況をおしつけられながら、インディアン文化を守り続けた生命力は、現代の危機に対して闘いをいどむだろう。このインディアンの闘いに、私たちも出来るだけの連帯を示していきたいと思う。

風

映画「久米島の虐殺」（8㎜カラー・磁気録音60分）貸出します。希望の方はWRI事務所まで

振替口座・大阪三三七三七　ウリジャパン（向井孝）

☆古切手・国鉄使用済切符のコレクションをしています。サンプルの代りに送って下さるとうれしい。 ふう

大逆罪復活！

―東アジア反日武装戦線の公判傍聴記―

どす黒い雲が街並を包み、湿った風が背中を撫で通り過ぎた8月20日早朝。屹立するビルの谷間を、噛み砕けぬ苛立ちを抱いたまま、歩き始めて…

8時ちょっと過ぎ、東京地裁前に辿りついた時にはすでに10名程が集まっていて、御丁寧にもその中にはいかにも私服ですといった顔付の私服も3名。肩を寄せあって小さくなっていたが、やがてあたりに私服・制服・私員・報道と溢れだすと、借りてきた猫も仮面がだんだんずりおちる。

10時を10分程過ぎた頃、701号法廷の扉が開きドヤドヤと傍聴席に、とたんに裳原裁判長のヒステリックな叫び声「傍聴人。首に巻いたタオルを取りなさい」。

いいじゃないか、自分の首にタオルを巻こうが、お前の首に縄を巻きつけようが、と緊迫した雰囲気で擬似裁判は始まる。被告席の黒川さんだけはランニングシャツ姿で。あとで知らされたことだが、例によって看守の暴行を受け、そのため上着は着られなくなってしまったそうだ。

午前中の証人調べ、被告人質問、さらに午後からの被告人質問が終わるや、検事が立ち上がって論告を読みあげる。まさに茶番だ。審理とは名ばかりで、おそらく何ケ月も前からできあがっていた論告をスケジュールに従って読みあげるだけ。

さて、この論告で気になった事が2つある。

ひとつは、情状のところで真先に荒川鉄橋事件（天皇の御召列車爆破計画）を取り上げ、それについてとうとうと述べたて、「日本国民統合の象徴たる天皇に対する極めて重大、悪質な犯行である」と結び、三菱重工・間組等は十把ひとからげに扱うその対比である。実質的な大逆罪復活だ。

ふたつめは、「被告人等は依然として反日武装兵士を名乗り、教化・改善は不可能だ。社会防衛上厳罰に処すべきだ」とした社会防衛論による論告・求刑である。それは改「悪」刑法に挿入されている保安処分の理念はすでに実行されている。

こういった論法でもって「被告人大道寺と片岡は死刑」…壁際を埋め尽していた延べ傍聴人に襲いかかる…「被告人黒川は無期・荒井は懲役10年」かわいた声で読みあげる。

「こんな酷い裁判見たことがない」「天皇こそ死刑になるべきだ」と傍聴席―。

「あれ」「それ」と指差しながら、退廷を命ずる裁判長。先刻までの眠そうに頬杖ついた姿とはうって変わった張切りようだ。

公判後弁護士会館にて集会。参加者のほとんどが発言し、極刑求刑に憤り、おそらく誰もが自称法治国家の歪みを凝視めていただろう。

その部屋の高所に掲げられた白の丸の旗がやけにシラジラしく眼に映った。

（鈴木喜三郎）

追記

公判廷に、大島英三郎さんと上野英信さんの姿があった。（大島さんはシンパに逮捕を命ぜられ、現外へ逃されたが）走る、走るさかんな南志に心からの敬意と拍手。

（誰がなんといおうとこれは断固オオカミなのだ！）

雑記帳

◇税務署が自衛隊違憲を認めた？

「良心的軍事費拒否の会関西グループ」（原俊子代表）のサラリーマン十八人がことし二月、税額から防衛費分の還付を求めて確定申告したところ、奈良税務署がうち一人だけに請求額を返してしまった。

◇国家予算に占める防衛費分五・五%を自分の税額に当てはめて請求したもので、還付金は二千円。わずかな額だが、返してくれなければ異議を申し立て、棄却されればさらに不服審査請求をと、長期戦を予想していた当人もびっくりしたが、もっと驚いたのは同税務署。「うちはまず請求通り返してから払い過ぎを戻してもらうシステム。自衛隊が違憲だと認めたわけではありません」と弁解。

◇ところが、そんな還付の手続きは認められておらず、大阪国税局から「言い訳はやめなさい」としかられシュン。申告内容を確かめずに還付したミスをしぶしぶ認めた。鬼の税務署員も人の子でした。

（朝日・7・11付）（毎日新聞・朝刊より）

税務署の中にもひそかに仲間がいる?!とよろこんでいたのに…税務署員はやっぱり役人でした。

（宣伝）

「軍事費拒否の手引き―泣くな自衛隊―」（B4判66頁）堂々完成

関西グループのメンバーが、夏休みを返上して汗だくになって創りあげました。四百円（〒共）

（先日本屋の店頭で見かけた「原発死」松本直治著・潮出版¥1200を買い一気に読みました。一人息子は北陸電力の原発部門で働いていて東海村原発で研修中被爆しガンで33才で死亡する。スリーマイル島原発事故等から原発ではないかの疑問から息子の日記等から確信するまでの手記で原発内部の事情が相当詳しく書かれています。今迄外部から推測していた事を実証してくれる本です。反原発運動グループで宣伝してほしい本です。ウリニュースで宣伝して下さい。父親が息子の死の原因を疑問から確信する様子が読む人にも確信をいだかせる力を持つ本であると思います。（千葉のウリの仲間Oより）

ニュー・ジャズ・アニオタ・コンサート（ソロ）

9月27日(木)PM1時～4時

出演 長船青治（ts・as・Per）

会場 マイナー（吉祥寺）TEL0422・21・4613

料金 500円（但しウリの仲間は多い合せアニオタ 0423・85・5425）

風変わりな原発反対デモ

（共同通信八月五日）

記事紹介

○…原子力発電に反対する風変わりな〝デモ隊〟が四日夕、大阪の繁華街をねり歩いた。往来で倒れ死んだふりをする『ダイ・イン』など、独特な方法で原発の危険性を訴えている市民グループ『原子力はごめんだ！　関西連絡会』の二十二人で、名付けて『「省エネルギー?!」納涼散歩』。

○…子供連れも混じった一行は、手に手に『原発はいらない』などと漫画入りで書きこんだうちわを持ち、鈴をナリーン、シャンシャンと鳴らしながら、商店街、目抜き通りをデモ。すれ違う通行人や商店主らにビラを配り、原発反対を呼びかけた。

○…『オーイ、電気が足らんてほんとか』『うそや』『省エネルギーなんてペテンや』『エネルギー一挙むだ使いしとるんはどこや』『大企業、原発や』などの漫才風のかけ合いをしながら約三キロを歩き、中之島の関電本社前で気勢を上げた。（大阪）

おしらせ

もうホンマに暑い夏でしたね。少々グロッキー気味。でも涼しくなってみると、なんかあっけなくて、名残りおしいかんじ。

9月3日　10・26準備小委員会
　5日　〃
9月7日　10・26事務員会ギ
9月10日　不払い連仕事堅
「省エネルギーキャンペーン」を撃つ反キャンペーンを原稿用紙一枚に書いてきて下さい。今回はWR一事務所でやります。PM6～
9月12日　宮本礼子さん公判PM1:00
9月14日　10・26第三回実行委PM7～
　原発にちょっとでも関心のある人は、一度顔を出してみませんか。
9月17日　不払い連市民講座
「省エネ噂の真相・新作小ばなし集」　6時半　¥3。　つゆくさ荘
8月15日の朝日新聞紙上で「原子力をどう考える」という討論で家事評論家の犬養富子さんは、スリーマイル島を訪ね、原発の危険性、恐しさを感じ、アメリカで起こったことは日本でも起りえると断言しながら、結論的には原発を必要悪として受け入れざるを得ないといっている。

「…〝原子力はノー〟というからには、生活水準が下がっていいという覚悟が絶対必要だと思う。私には、その自信がないし、そんなことは実際好まない。」

この彼女の本音は、たぶん日本に住むほとんどの人を代表している。反原発をいっている私たちに、はたしてどれだけの覚悟があるだろうか。敵はとにかく死活問題なのだ。彼等以上の切実さで、反原発を自分の問題としてはなかなかとらえにくいというのが実状だ。

だが原発を選ぶにしろ、拒否するにしろ、このまま「豊かな」生活を維持しつづけることは出来ない話なのだ。いずれにしても覚悟は決めておいた方がよさそうだ。

風

（今号は、新聞に載った記事を二つそのまま引用してのせました）

集会その他の問い合せは　647・4089まで